

第IV部門 地元住民からみた水辺環境評価

京都大学工学部	学生員	○松島 敏和
京都大学工学部	学生員	柴田 翔
京都大学防災研究所	正会員	萩原 良巳
佛教大学	正会員	萩原 清子

1. 本研究の目的

環境の構成要素がジオ(Geo；物理)・エコ(Eco；生態)・ソシオ(Socio；社会)の3つに分類されると考える。ジオ環境は地球物理学的法則に、エコ環境は生態学的法則に、ソシオ環境は社会の振る舞いを支配する法則に従う[1]。この分類に基づき、水辺のジオ・エコ・ソシオ環境を生活者[2]の視点から眺め、「生活者参加型環境マネジメント」とは何かを考える。

そのためには、生活者がメタレベル・アクタレベルの参加[3]を通してどのように水辺のジオ・エコ・ソシオ環境と関わっているのかを明らかにする必要がある。本研究では、様々な属性や行動様式を持っている重層的な生活者の中でも特に水辺に暮らす地元住民に着目し、社会調査によって地元住民の感性からみた水辺環境の評価を行う。

2. 調査方法

研究対象地域を鴨川流域とし、京都市中京区末丸町(丸太町橋南側、鴨川右岸沿い)においてアンケート調査票による社会調査を行った。

調査票は以下の3段階のプロセスで作成した。

- (1) 調査課題の明確化
- (2) 調査項目の設定と共通認識の形成
- (3) 調査票の形式化

ここでは、地元住民の感性に関する調査項目に重点を置いた。調査項目をジオ・エコ・ソシオ環境それぞれに関するものに分類し、属性を含めて44項目を抽出した。

具体的な調査の実施方法は、末丸町町内会長に調査票の内容確認をしてもらい、調査実施の了承を得た上でポスティングにより調査票を配布した。配布後約3週間で61件の調査票を回収した。

3. 調査結果の単純集計とクロス集計

単純集計において回答者の8割以上が反応した選択肢は、地元住民の特徴を示す前提条件と考える。地元住民のキャラクターとして以下が抽出された。

- ①春によく鴨川に訪れる
- ②河川敷の広さは(遊びや散策などに)十分と思っている
- ③家族に小学生以下の子供がいない人が多い
- ④犬などのペットを飼っていない人が多い
- ⑤ソメイヨシノ、紅しだれ桜、ヤマザクラ、キンモクセイに興味があり、桜(ソメイヨシノ、紅しだれ桜、ヤマザクラ)が好きである
- ⑥五山の送り火を楽しみにしている
- ⑦清掃活動をしている人たちを見たことがある
- ⑧すっきりした河原が好きである
- ⑨鴨川がそばにあってうれしい

またクロス集計、クラメールの関連係数より属性項目において居住形態(マンション・一戸建て)が他の属性項目との関連が強く、地元住民を語るにおいて有意な分割として抽出された。

4. 鴨川の印象のプロフィール分析

SD(Semantic Differential)感性データを用いてプロフィール分析を行う[4]。8項目の形容詞対に対する5段階評価で中央が意味的原点(無意味)である。

図1は地元住民(サンプル数：53)と鴨川の釣り人(サンプル数：20)のプロフィールである[3]。図2はクロス集計によって有意な分割として抽出された地元住民の居住形態の違い、すなわちマンション(サンプル数：35)、一戸建て(サンプル数：18)の違いに着目したプロフィールである。

図1において、地元住民は鴨川を特に「親しみやすい」と感じ、概ね好ましい評価である。これに対して釣り人は鴨川を人工的で、ごみごみしていると感じている。図2において、居住形態の違いによって目立った差異は見られなかったが、一戸建ての人のほうが全体的にやや厳しい評価をしているということがいえる。

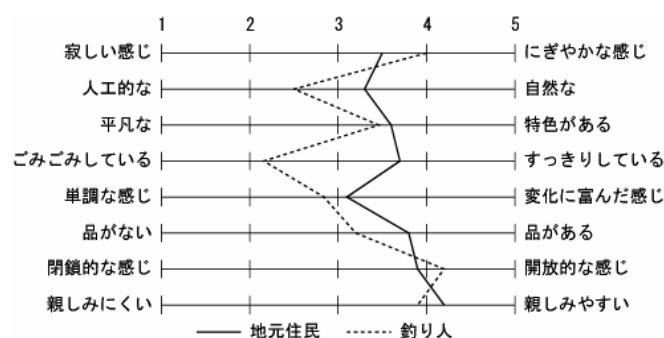


図1：地元住民と釣り人のプロフィール

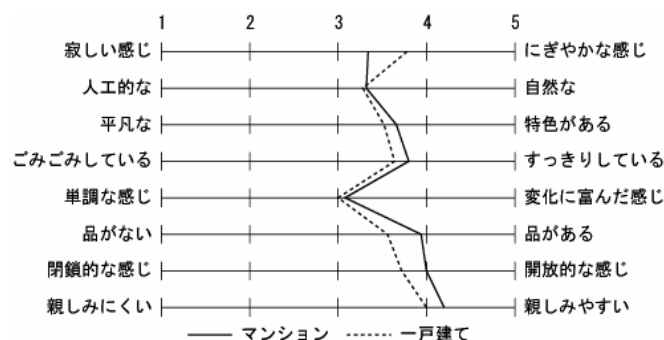


図2：マンションと一戸建てのプロフィール

5. 「好き・嫌い」による鴨川のエコ環境評価

生態に関する調査項目によって、鴨川に存在する生物種に対する地元住民の「好き・嫌い」の結果が得られた。その結果を名義尺度による感性評価と仮定し考察する。つまり、それぞれの生物種に「好き」または「嫌い」の判断を下すこと自体が大きく感性に影響されるため、好ましさの指標としてみることができると考える。「鴨川にいる生物が好きである」ということは、その人にとって鴨川のエコ環境が好ましいものであると解釈する。

ここで、その生物種に対する関心度を「好き」または「嫌い」の反応があった総数と定義する。回答数の約半数である 30 人以上が反応した関心度の高い生物種に着目し、それが「好き・嫌い」のいずれ

に反応しているかによって、地元住民の感性による鴨川のエコ環境評価を行う。

(1) 鴨川の鳥についての評価

鴨川を代表する水鳥(カモ、サギ)、渡り鳥(ユリカモメ、ツバメ)、小型の水鳥(カワセミ、セキレイ)が存在していることを、地元住民は好ましいと評価している。逆にカラス、ハト、トビといった水鳥以外の鳥類の存在を好ましくないと評価している。

(2) 鴨川の魚についての評価

アユ、コイ、フナ、ゴリが存在していることを、地元住民は好ましいと評価している。逆にブラックバス、ブルーギルといった外来種の魚類の存在を好ましくないと評価している。また「固有種を守るために外来魚を絶滅すべきでしょうか」という質問項目の結果より、7 割以上の人が外来魚を絶滅すべきだと思っている。

(3) 鴨川の植物についての評価

関心度の高い植物すべての存在が地元住民は好ましいと評価している。特に桜(ソメイヨシノ、紅しだれ桜、ヤマザクラ)は、圧倒的に好ましいと評価されている。桜が好きであるということは単純集計によって抽出された地元住民のキャラクターでもある。

6. 参考文献

- [1] 萩原良巳：環境と防災の土木計画学，大学院講義ノート，2006.
- [2] 萩原清子(編著)：新・生活者からみた経済学，文眞堂，2001.
- [3] 柴田翔：京都大学工学部特別研究「水辺環境における釣り人の選好と感性の社会調査」
- [4] 神宮英夫：印象測定の心理学，川島書店，1996.

7. 謝辞

本研究の社会調査において、回答してくださった末丸町町内会の皆様に感謝いたします。また貴重なご意見も数多くいただきました。今後の研究に活かしていきたいと思ひます。